

33 敦煌文書 O・六一三(露)と

P・三二八七(仏)の合致

荒尾敏雄

敦煌文書のうちロシア東方文化研究所に所蔵されるオルデンブルグ獲得文書は従来詳細は明らかでなかったが、近年中国との協同研究で整理され、『ロシア科学院東方研究所サンクトペテルブルグ所蔵敦煌文献』(上海古籍出版社)と題して刊行されつつある。その第七冊(一九九六)に凶版が掲載されているオルデンブルグNo・〇〇〇六一三(以下O六一三と略)は中国人学者によって「黄帝内経卷六」と同定されているが、それは「黄帝内経」と呼べるものではなく、実はフランスのパリ図書館に所蔵されるペリオNo・三二八七(以下P三二八七と略)と同一書の分かれてあり、O六一三はP三二八七の前面に接続する残紙であることを筆者は発見した。以下その根拠を列挙する。

(一)「三部九候論篇」の続き

『黄帝内経素問』卷六・三部九候論篇第二十は、黄帝が三部九候について岐伯に質問する問答形式で書かれた内容である。O六一三は全二八行の断片であり、行番号一七～二八にかけて三部九候論の内容と相似する。二八行の最後は「三部者各有天地人故以」で切れており、この後に現伝『素問』を参照すれば「三而成天三而成地三而成人三而之合則為九」と続くことが予想される。次にP三二八七を見ると「各別九九野九蔵」と始まっており、その前の行で上述の「三而成天……合則為九」が書かれてあったことが予想される。このO六一三の切れた後半部分からP三二八七の文頭までの欠損文字は、現伝『素問』を参照するとわずか一九文字にしかすぎない。しかしO六一三の二八行と現伝『素問』を比較してもわかるように、O六一三の文書は簡潔に書かれていることから、その欠損部分の文字は一九文字より少ない可能性が高い。いずれにせよこの二つの文書を重ねてみたとき三部九候論篇の文が欠損部分の文字十九文字以内というごくわずかの文字数でつながるといふことと、二つの文書の

全内容が脈を中心として一貫性をもつということがわかる。

(二) 縦の文字数

上述したようにO六一三は下半分を欠損しているため縦の文字数が正確に何文字あったのか、それを考えるには推測するしかないため、P三二八七を基にして考えてみる。P三二八七の縦の文字数は大体二二〇二五文字である。O六一三がP三二八七と同一紙であるならば、この文書の縦の文字数も大体二二〇二五文字と考えることができる。例えばO六一三の十二行、これは『難経』一難の部分と相似するものであり、いま現伝『難経』と比較してその文字数を計算する。十二行は「……脉行五」で終わり下半分欠損、計一六文字。次の一三行頭は「剋營衛元氣……」と始まる。この欠損文字をいま『難経』の文と比較して計算すると九文字になる。つまり計二五文字。しかし欠損部分の文字数が正確に九文字であることは(一)で述べた理由から断定できないが、恐らくO六一三の縦の文字数も二二〇二五文字くらいであったという可能性は高い。

(三) 文書の体裁

今回のO六一三はカラー写真で公開されたため、文書の体裁も鮮明に判断できる。その特徴を上げると、①界線があること、②文書の切れ目に朱色の丸印があること、③注の入れ方、などである。さらに二文書が同一書の分かれであることも決定づけるのに、一紙の横幅(行数)がある。すなわちP三二八七は一紙二六行の紙を貼り継いだものであるが、O六一三の第二紙は一三行、P三二八七の第一紙も一三行。計二六行となり、一紙の行数といい、紙の破片状態といい完全に符号するのである。

以上列挙した根拠からロシアに流出したO六一三とフランスに流出したP三二八七は同一文書であると判断しうる。これによってO六一三の素性が明らかになった。

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部)